

花一会図書館便り

【TEL&FAX】

0136-57-6085



花一会 HP

8・9 月号 花一会図書館 作成/令和8年 9 月15日発行



Facebook



Instagram

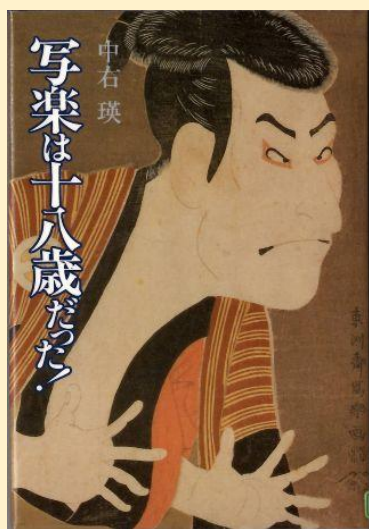


X(旧 Twitter)

第25回 「郷土探索への道 歴史搜索・探索編⑩」

謎の天才絵師・写楽、彼の子孫は蘭越町に住んでいた……？

ある利用者から持ち込まれた 1 冊の本、『写楽は十八歳だった！』（中右瑛 著／里分出版／1985 年）。浮世絵バカ、写楽バカを自認する浮世絵コレクターが書いた写楽論だった。



「大正十四年六月二十一日付け朝日新聞が、人類学者・鳥居竜蔵博士によって「写楽の墓が徳島市内の本行寺にあると突き止められた！」と報じた。写楽が阿波出身の能役者・斎藤十郎兵衛である、とした。斎藤月岑説（後述）を裏付けたもので、朝日新聞紙上に載った鳥居博士の談話によると、「写楽の墓所については……中略……彼の子孫は、現在では北海道後志国磯谷郡尻別村字ニセコワンベツに居る齋藤昇三氏である。彼の祖は、明治維新に當つて食禄をはなれ、家傳の貴重な能衣裳も大分あつたのをある素封家に預けて、籠屋町に引込み、ブリキ屋をはじめたが、士族の商法でそれも失敗して大阪に移り、更に現在の北海道に行くことゝなつたといふことである。預けた能衣裳は明治二十七年の大火で焼失した。……略……」（談）（91～93P）

「北海道後志国磯谷郡尻別村字ニセコワンベツ」、「ニセコワンベツ」が「ニセコアンベツ」と同地とすれば現在のどこに位置するのか。『蘭越町史』（1964 年発行）の記述からたどってみた。

第 3 章 分村—南尻別村の誕生 より抜粋

「明治2年、政府はこれまで 100 余年のながいあいだつづいた場所制度を廃止して開拓使を置き、全道を 11 か国に区画したが、これによって磯谷場所は後志国磯谷郡となり、米沢藩士の山田民弥が郡詰に命ぜられて、全郡の統治に当たった。……中略…… このとき磯谷郡は横間、島古丹、能津登、尻別の4か村に区画され ……略……」（129P）

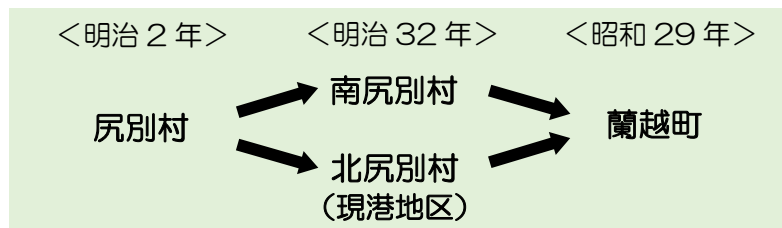
「当時は豊漁の連続であつたので、やはり漁業地帯中心は是正されず、農業地帯に対する施策はなにひとつみるべきものがなかった。入植以来あらゆる困苦に堪えて開墾してきた人たちは、これまでも、くりかえし農業地帯発展の施策を講ずるよう要望したのであるが、ついにとりいれられないまま本日に立ち至つたので、この際、結束して漁業地帯と離れ、よりよい農村を築きあげようと、分村にふみきつた。そして村名を南尻別村とし、村のほぼ中心で、すでに市街を形成していた本目名（現名駒）に南尻別村戸長役場を設置した。実に明治32年8月のことである。……中略…… 母村の尻別村は、分村のとき北尻別村とあらため、明治35年に至り、横間村、島古丹村、能津登村の3か村と合併して磯谷村となり、大字北尻別村となった。」（130～131P）

※大字北尻別村は現蘭越町港地区

——裏面へ続く——

昭和29年12月1日、町政施行と同時に南尻別村その名称も磯谷郡南尻別村から磯谷郡蘭越町になった。(北尻別村は、昭和30年4月1日に蘭越町に編入された。)

磯谷郡尻別村は、現在の蘭越町である。



【参考資料】『写楽は十八歳だった!』(中右瑛 著/里分出版/1985年)、『蘭越町史』(蘭越町/1964年)

「ニセコワンベツ」とは何処なのか…… ——次号へ続く——

今月のおすすめ本 コーナー

旅行記

『祖母姫、ロンドンへ行く!』

榎野道流(小学館)



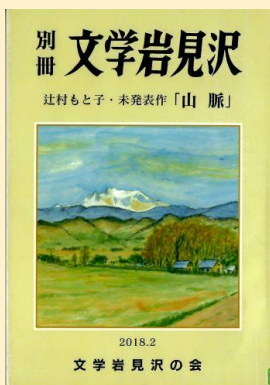
昨年の6月、花一会で手に取った。その時は、手術後に読もうと思って持っていたが、とてもとても痛いだけの日々。退院後、じっくり、読む。とても読みやすい。法医学者である事などかけらも感じさせない。いつか私もロンドンに行ってティムに逢いたい!

そして3回目、やっぱり読みたくて借りてきた。謙虚と卑下は違うもの。「自信がないから自分のことをつまらないものみたいに言って相手を見くびって楽しもうとするのはやめなさい。それは卑下、とてもみっともないものよ。」おばあ様の言葉がズンと胸に響きました。(蘭越町 西村)

小説

『別冊 文学岩見沢 辻村もと子・未発表作「山脈」』

小川哲(朝日新聞出版)



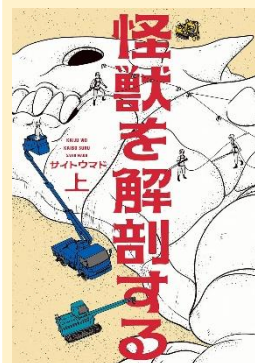
開拓成功者の父親を描いた『馬追原野』で有名な辻村もと子。本作は岩見沢の農場を舞台に、農場主の娘が小作人の幸福のために何ができるのか。継母と実父が望む義弟との結婚という

運命に抗い、真摯に生きようとする女性を描いた物語です。(蘭越町 伊藤聡)

マンガ

『怪獣を解剖する 上下』

サイトウマド(KADOKAWA)



突如現れた謎の怪獣によって被害を受ける日本。主人公は、自身も被災し家族を失った女性。怪獣学者として怪獣の死骸の解剖調査現場へと向かう。

ただの怪獣退治エンタメではない。真摯にそれぞれの仕事と向き合う人々、ジェンダー問題…。人に、物語に、引き込まれていく。「2026年 手塚治虫文化賞 新生賞」受賞作。